

幼小をつなぐ音楽教育のプログラム開発

—「祇園囃子」を教材として—

岡 林 典 子

(児童学科教授)

佐 野 仁 美

(京都橘大学)

坂 井 康 子

(甲南女子大学)

南 夏 世

(神戸海星女子学院大学)

山 崎 菜 央

(附属小学校教諭)

本研究では京都の子どもたちの「郷土の音楽」である「祇園囃子」を教材として、幼小をつなぐ音楽教育のプログラムを開発し、実践を通してどのような学びが得られるのかを検証した。その結果、子どもたちが生活経験と結びついた学習を進め、楽器の音の違い、奏法、音楽の成り立ちについて気づきを得たことが確認できた。また、幼児期に芽生えた協同性が、小学校1・2学年の子どもとの人間関係の発達と関わりながら深化していくことが示唆された。

キーワード：幼小接続、音楽教育、プログラム開発、祇園囃子、協同性

1. 研究の背景と目的

新たな幼稚園教育要領、保育所保育指針、並びに幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下、幼稚園教育要領等)では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が「自立心」「協同性」「豊かな感性と表現」など具体的な10項目に整理され、幼児期に育まれる資質・能力を小学校の各教科の学びへと系統的につなげることが明示された。一方、新小学校学習指導要領においても、幼児期に育まれた資質・能力を更に伸ばしていくことの重要性が示されている。幼児期の教育が小学校以降の生活や学習基盤の形成につながることを考慮して、円滑な接続を図るようすることは、改訂以前からも指摘されてはいたが、この度の改訂では留意事項として、より具体的に小学校教育との接続や連携が示されたのである。

筆者らは、校種は異なるが共に音楽教育と表現教育に携わる者として、これまで幼児期と小学校の教育をつなぐ音楽活動の可能性について、実践に基づき研究を重ねてきた¹⁾。これらの研究では、絵本やわらべうた、遊び歌を教材として、「かけ声」「唱えことば」「オノマトベ」などに着目し、音楽表現の活動を展開してきた。

成果としては、子どもたちの感性の素地を育む試みを提示できたと考えている。

新幼稚園教育要領等では、我が国や地域社会の様々な文化に親しむことに配慮して、領域「環境」において「我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」「我が国の伝統的な行事」「わらべうた」などの文言が加わり、身近な文化に根差した題材を活用した保育のあり方が求められている。また、新たな小学校学習指導要領においても、「我が国や郷土の音楽」に関する学習の充実を図ることが改訂の要点として上げられ、子どもの生活や文化と結びつく「郷土の音楽」に目が向けられている。

伊野(2003)は「郷土の音楽」を「郷土という存在そのものを基盤とし、その空間的精神的歴史的な枠組みの中に形成される音楽である」と捉え、その教材性として、「音楽の『自分』へのつながりを実感させ、『自分』からの広がりを見出し、展望させるための教材の価値」を見出している²⁾。そして、「自分が生まれ育った郷土に伝わる音楽の事実を受け入れ、味わうことにより、これまで何気なく見聞きしていた音楽、まったく自分とはつながりがないと思っていた音楽を、自身との関係においてとらえること」こそ、

学習の基盤があると指摘している。

筆者らの所属大学がある京都では、1000年以上の伝統を誇る「祇園祭」が毎年7月1日から1か月にわたって行われ、駅や街中でも「祇園囃子」が流れ、京都の風情を彩っている。京都で暮らす子どもたちは、町の保存会の人々や祖父や父親、兄弟が囃子方として練習する姿に触れたり、家の近くから「祇園囃子」が聞こえて来たり、家族と共に祭に出かけたりなど、「祇園祭」が生活経験と結びついた身近な伝統的行事となっている。

そのような「祇園囃子」を音楽の授業教材に用いた先行研究には、祇園祭を核として小学校6年間にわたるカリキュラム開発を行った事例⁹⁾や、祇園囃子の特性を生かしたお囃子づくりの授業開発の試み⁴⁾、郷土の教材から指導内容を考える報告⁵⁾などがある。しかし、いずれも幼児を対象にするまでには至っていない。

他方、「平野郷夏祭りのだんじり囃子」を教材として幼稚園年長児、小学校3年生、小学校4年生を対象になされた実践事例⁶⁾では、「だんじり囃子」がどの学年にもあてはまる教材であることが示唆されている。近年では、学習指導要領の改訂に沿って、小学校でも日本の音楽を教材とした授業が試みられるようになってきたが、幼小をつなぐ接続期の試みは、まだ数少ない状況にある。

そこで、本研究では京都の子どもたちにとって「郷土の音楽」である「祇園囃子」を教材として、幼小をつなぐ音楽教育のプログラムを開発し、実践を通してどのような学びが得られるのかを検証する。

尚、本研究では幼稚園年長児・小学校第1学年・第2学年を対象として音楽教育のプログラムを計画し実践を行ったが、紙幅の都合により、本稿では第2学年の実践を中心に述べ、幼稚園と第1学年の実践については概要とする。

2. 実践全体の計画

2.1 実践の目的・方法

本実践では、「祇園囃子」を教材として考案したプログラムが、幼稚園年長クラス・小学校

第1学年・第2学年の子どもたちの学びにどのようによいものであるかを探りたい。

方法は、五線譜ではなく▲と○で表された「祇園囃子」のリズム譜やかけ声カードを作成し、それらを基本教材として鉦や締め太鼓を加え、発達段階に応じた内容で実践を行う。また、ビデオカメラ3台を設置し、3方向から子どもたちの様子を記録する。

2.2 教材の特性とプログラムの作成

(1) 「祇園囃子」の特性

祇園囃子に特徴的な鉦の音は、「コンチキチン」という特徴的な擬音で表されることが多い。「コンチキチン」と表す祇園祭の鉦の音について、樋口(1991)は「このように音は風景を描き、その風景や空間シンボルとなることが多い。とくに祇園祭では鉦の音がシンボルとなり、コンチキチンと聴く言葉で音の風景を描く⁷⁾と述べ、京都の街の風景のシンボルとして鉦を位置付けている。

また、高橋(2015)は、江戸時代以前は囃子を奏す目的が稚児舞を囃すことであったのが、時代の流れとともに山鉦の進行を囃すことに目的が移行したために、現在の楽器編成は、音が大きくて周囲に聞こえやすい鉦を中心楽器とした編成が要求されることになったと述べている。そして、そのような経緯を経た「コンチキチン」の鉦の音色こそが祇園祭の象徴であり、祇園囃子の特性であると指摘している⁸⁾。

(2) 実践プログラムに向けた教材の作成

実践プログラムの作成に先駆けて、筆者らは菊水鉦の囃し方の練習風景を参観させてもらい、鉦の打ち方や並べ方などを学んだ(図1・2)。

また、「祇園ばやし」の楽譜⁹⁾(図3・4)を参考にして、子どもたちに提示する▲と○で表されるリズム譜を作成した(図5)。加えて、楽譜とCD¹⁰⁾を参考に多様なかけ声を調べ、子どもたちが自由に選択できるように、「よい」「それ」「いや」「まだ」「やー」「はい」の6種のかげ声カードを作成した(図6)。長刀鉦や月鉦の楽譜では、かけ声がかたかなで表記されているが、幼稚園児や1年生の子どもたちが読めるようにすべて平仮名にした。



図1 菊水鉦の練習風景 ①



図2 菊水鉦の練習風景 ②

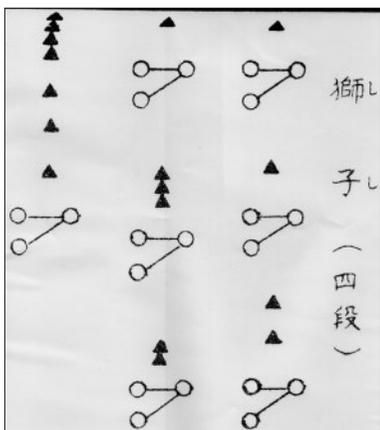


図3 長刀鉦の鉦の楽譜

本研究では対象となる子どもの発達段階に応じて、作成するプログラム内容を変化させるが、「口唱歌」「かけ声」「和楽器（鉦・締め太鼓）」はすべての対象に共通して用いることにする。

伊野（2019）は「日本語を話し生活している日常的な営みは、日本音楽と本質的な部分でつながっている」と述べ、^{くちしやが}口唱歌（以後、唱歌とする）が「日本語から生まれ、言葉の特性を丸ごと抱え込みながら、日本音楽を表現するため

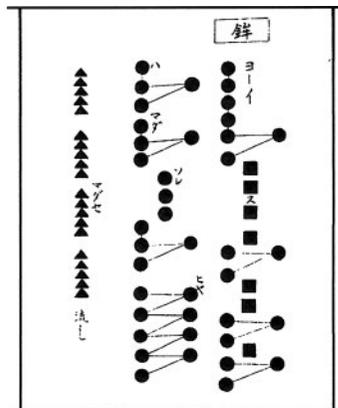


図4 数種のかげ声がみられる月鉦の鉦の楽譜

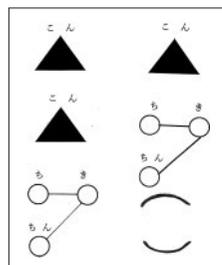


図5 筆者が作成した祇園囃子の楽譜



図6 筆者が作成した「かけ声」のカード

古くから用いられてきたこと」「日本語を話す人々にとって、音楽をする際の極めて自然な行為として生まれ、次第に様式化してきたものであること」「唱歌を歌いながら音楽を学ぶ学習は、言葉と体に内在している音楽性を引き出すこと」「日本の子どもにとっては、唱歌を歌いながら音楽を学ぶことは特別な行為ではなく、とても身近な営みであること」など、音楽の学びにおいて唱歌を唱えることの意味を指摘している¹¹⁾。

一方、「かけ声」は唱歌とは異なり、演奏時に発せられる。また、かけ声は我々の日常生活の中でも用いられ、子どもたちが遊びや練習などで声を合わせるときに、「せーの」という言

い方をするのもかけ声であり、頻繁にみうけられる。また、かけ声は拍をカウントしなくても、互いの息がぴったり合って唱和できる¹²⁾。

このようなことから、本研究では幼稚園年長児・小学校第1学年・第2学年のいずれの子どもたちにも、祇園囃子に使われる和楽器（鉦・締め太鼓）を用いるとともに、子どもたちの日常の営みと音楽学習をつなげる方法として、「口唱歌」と「かけ声」を取り入れることにした。

(3) 対象別のプログラムの作成

ここでは、幼児期から小学校への接続期におけるプログラムの内容の違いを比較しやすくするために、各対象の2回分の実践をひとまとめにして、内容を提示する。

表1は、幼稚園年長児を対象としたプログラムである。ここでは、祇園囃子の口唱歌を知り、唱歌とかけ声のタイミングが合う心地よさを感じること、幼稚園生活ではあまり体験していない和楽器の音に触れることをねらいとして、実践内容を計画した。

次に、表2は小学校第1学年を対象としたプ

表1 幼稚園年長児を対象としたプログラム

題材名	祇園囃子の口唱歌から表現を広げよう
題材の目標	・ 祇園祭を知り、お囃子の唱歌とかけ声のタイミングが合う心地よさを感じる ・ 和楽器の音に触れ、音を出して楽しむ
第1回の計画内容	① CD、DVDを視聴し、クイズ形式で祇園祭の知識を深め、お囃子の唱歌を知る。 ② ▲と○のリズム譜と「こんちきちん」の唱歌を覚え、皆で唱える ③ かけ声カードから、かけ声を選ぶ ④ 唱歌とかけ声をタイミングよく合わせ、かけ合いを楽しむ
第2回の計画内容	① 4フレーズの口唱歌に慣れる ② 6種のカードから、かけ声を選びリズム譜の()内に入れて唱える ③ 3人で3つのかけ声を1つずつ担当し、クラス全員とのかけ合いを楽しむ ④ 竿につるした鉦を打ち、音色を楽しむ

ログラムである。第1学年では導入である第1回の①②は幼稚園の内容と同じであるが、1年生は文字の読み書きを学習しているため、視覚的にお囃子のリズムを捉え、かけ声も確認できるように楽譜の掲載されたワークシート（図7）を準備した。また、「こんちきちん」という馴染みのある祇園囃子の唱歌を覚えて、普段はあまり触れることのない鉦や太鼓の音色の違いを感じて合奏できるように、幼稚園児対象のプログラム内容を小学1年生用に発展させた。

表2 小学校第1学年を対象としたプログラム

題材名	祇園囃子の唱歌を覚えて合奏をしよう
題材の目標	・ 祇園祭を知り、お囃子の唱歌とかけ声のタイミングが合う心地よさを感じる ・ 和楽器の音に触れ、合奏を楽しむ
第1回の計画内容	①と②は幼稚園の第1回の①②と同じ ③ かけ声カードで6種のかけ声を確認し、ワークシートの課題1に記入する ④ 課題2にかけ声を記入し、唱え合う
第2回の計画内容	① 鉦と締め太鼓の楽器を紹介し、打ち方を説明する ② ワークシート課題2のリズム譜を「こんちきちん」と唱えながら鉦を打つ。鉦以外の児童は唱歌とかけ声を担当する ③ ▲だけが並んだリズム譜を見ながら、締め太鼓を打つ。 ④ 参観した大学生の篠笛と合わせる

表3は、小学校第2学年を対象としたプログラムである。導入部分である第1回の①②は幼稚園の内容と同じであり、③④では第1学年と同じワークシートを使用する。本年度の第2学年は、1年前の第1学年時に和楽器と祇園囃子の唱歌も経験しているため、かけ声と唱歌のやり取りもスムーズに進むことが予想されるため、表2における第1学年の2回目の内容①②③を第1回目の内容に繰り上げた。

さらに、第2学年になると協同性の育ちによるグループ学習も可能になることを見据え、グループでの話し合いを取り入れた祇園囃子づくり（リズムフレーズの組み合わせによる）を学



図8 唱歌の楽譜を指す保育者



図9 意欲的にかけ声カードを選ぶ



図10 鉦を打つ子どもたち

声が聞かれた。続いて、菊水鉦の練習風景に見立てた竿につるした鉦を打ち（図10）、その音色に祇園祭の風情を感じて楽しんだ。

4. 小学校第1学年での実践

紙幅の都合により第1学年での2回の実践も概要とする。尚、実践の詳細は別紙にまとめている¹⁴⁾。

■実践対象：京都女子大学附属小学校第1学年

2クラス81名

■実践日：2019年7月2日と7月5日

附属小学校の約半数は京都幼稚園からの進学者であるので、対象児童の半数は、筆者らとともに幼稚園で和楽器に触れた経験を有している。実践のプログラム内容については、事前に小学校教諭の山崎と岡林・佐野が話し合いを持った。そして幼小接続の観点から、「京都の音文化に触れる」というテーマで「祇園祭」「祇園囃子」を題材とした全2時間の指導計画を立てた。導入部分は幼稚園の実践とほぼ同様であるが、小学校では文字の読み書きができることをもとに、ワークシートを用いて6種類のかけ声を選択して番号を記入したり（図11）、一人ずつがワークシートに記入したかけ声を、全員で止まらずにつないで唱えるなどを行った。



図11 ワークシートにかけ声を記入する



図12 鉦の打ち方を工夫する



図13 大学生の篠笛を傾聴する

また第2時には、子どもたちの協同性の育ちを踏まえて、クラス全員で太鼓や鉦、かけ声の役割分担を回しながら、お囃子を演奏するに至った(図12)。祇園囃子には笛の音が欠かせないので、両日とも大学生3名が参加して篠笛を吹き、祇園囃子の風情が感じられる実践となった(図13)。

5. 小学校第2学年での実践

5. 1 実践の方法と手続き

第2学年は1年時に和楽器に触れ、祇園囃子の唱歌も経験しているので、かけ声と唱歌のかけ合いがスムーズに進むことが予想された。導入部分は幼稚園や第1学年の内容と同様に、祇園祭に関連する「八坂神社」「山鉦」などの写真を提示し、神社の名前をクイズにしたり、映像を見ながら、お祭の始まった理由を説明したりした。また第1学年と同じワークシートを使用し、第1学年の2回目に行う鉦や締め太鼓の打ち方や、それらの合奏を繰り返して、第1回の内容とした。さらに、協同性の育ちによるグループ学習も可能であろうと見通して、グループでリズムフレーズを組み合わせてオリジナルの祇園囃子をつくる学習内容も取り入れた。また、授業の感想をまとめることを課題とした。

5. 2 第1時の様子

第2学年の第1時では、祇園祭についての知識を得た後、配布されたワークシートに記入されたかけ声と、「こんちきちん」の唱歌のかけ合いがみられた。

次に、鉦と締め太鼓の打ち方を学び、数人ずつ交代で楽器を奏し、唱歌とかけ声も伴い、皆

でお囃子の合奏を行った。子どもたちはお囃子の音楽を自分たちで奏でることに興味を持った様子で、集中して演奏に取り組んでいた(図14)。



図14 お囃子の演奏に取り組む2年生

5. 3 第2時の様子

第2学年の第2時では、5パターンのお囃子のリズムフレーズを組み合わせて、グループでオリジナルのお囃子をつくることを目指した(図15)。子どもたちは7～8人のグループになり、話し合いながら自分たちのリズムを作っていた(図16)。

ある程度決まった時点で、手拍子や唱歌を唱



図15 リズムパターンの説明を聞く



図16 グループで話し合い、曲をつくる



図17 唱歌を唱えながら練習する

えて練習を進め（図17）、発表では鉦と太鼓を用いて演奏した。参観していた大学生3名が篠笛を吹いて各グループに加わり、祇園囃子の雰囲気を出し、子どもたちは楽しそうに演奏を行った。

5. 4 子どもたちの感想

2年生の子どもたちは、グループ発表の後、それぞれがワークシートに素直な感想をまとめている。詳細な分析は次章で行うが、以下にくつかを取り上げる。

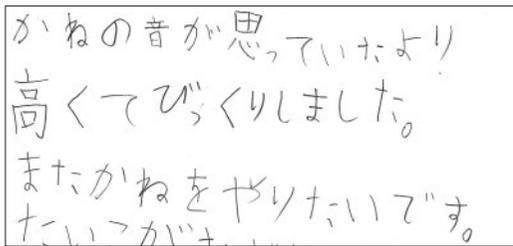


図18 2年生Aの感想

2年生のAは、鉦の音色について述べている。「思ったより高くてびっくりした」という記述（図18）には、響く鉦の音を屋外で祭囃子として聞くのではなく、間近で楽器としてその響きと音色に触れ、思っていた以上に高く響いて聞こえたのであろう。筆者らも菊水鉦の練習場面に1時間くらい参加したが、初めて間近で鳴る鉦の音に触れて圧倒された記憶がある。

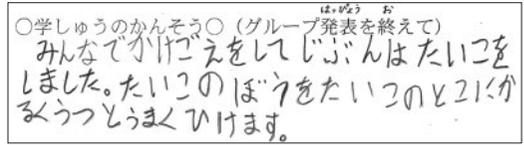


図19 2年生Bの感想

2年生Bは、締め太鼓の打ち方について述べている（図19）。おそらく練習時に「太鼓の棒を軽く打つと上手くひける」ことを会得したのであろう。確かに締め太鼓のバチは、軽く打つと弾みが得られ良い音が鳴る。Bの感想には、太鼓の奏法に対する気づきを読み取れる。

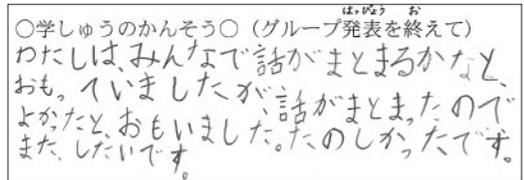


図20 2年生Cの感想

続く2年生Cは、「みんなで話がまとまるかなと思っていましたが、話がまとまってよかった」と、グループのメンバー同士がどのように協力し合えるのかという協同性について触れている（図20）。感想には不安な思いと安堵した様子が表されている。また、「楽しかった」「またしたい」という記述には、お囃子をつくって演奏したことがCにとって楽しい経験であったことが伺える。

6. 考察とまとめ

6. 1 実践から子どもたちが得た学びと気づき

祇園囃子を教材としたプログラムについて、子どもたちは何を感じ、どのような学びや気づきを得ていただろうか。幼稚園年長児、1年生、2年生と発達段階の異なる子どもたちは、それぞれに楽しみながら活動に取り組んでいた。

幼稚園では、CDを聴いて踊りだす子どもが数人みられた。また、かけ声のカードを意欲的に選ぶ姿や、「もっとしたい」という発話からは、作成した教材が年長児の興味や表現意欲を引き出すことに有用であったと捉えられる。

また、1年生では授業の最後に、「楽しかった」「面白かった」「嬉しかった」などの肯定的な感想と、「本当の祇園祭みたいだった」「祇園祭に行きたくなった」「笛が入ったらお祭の感じがした」などの感想が述べられた。同様の感想は2年生でも挙がっており、「楽しかった・面白かった・嬉しかった・やりたい」などの肯定的な感想は全体81名のうち62名(77%)あり、「難しかった」の12名(15%)の5倍以上であった。加えて、「お姉さんたちが笛を鳴らしてくれて、本当に祇園祭にいるみたいに本格的で綺麗な音になって面白かったです」「太鼓、鉦を使って班でやりました。お姉さんは笛をやって、本物の祇園祭を私は思いました」などの記述が多数みられた。

「郷土の音楽」の教材は、教科書の世界からの提示物ではなく、子どもの生活圏にあり、子どもは生活経験を通してその教材に関する知識や技能をすずにもっている¹⁵⁾。上述した子どもたちの感想は、そうした生活経験の基盤をもとに述べられていると言えよう。1年生の感想にみられる「本当の祇園祭」や「行きたくなった祇園祭」、並びに2年生の感想に挙げられた「本当にそこに居るみたいな祇園祭」、「本物の祇園祭」などの表現は、子どもたちのこれまでの経験にある「祇園祭」であり、それとの比較において感想が述べられているのである。つまり本実践では子どもたちが生活経験と結びついた学習を進め、気づきを得たことが示唆される。

この他に、1年生では「いい音が鳴った」「いろんな音が聞こえて楽しかった」などの音色に関する感想も述べられていた。2年生では「お姉さんの笛の音がとてもきれいだった」「一つの太鼓の音ともう一つの太鼓の音が違って面白かった」「コンコンチキチン コンチキチンという音はきれいな音で大好きです」「私は力を合わせてきれいな音を出すために軽く叩きました」「鉦や太鼓を鳴らしてみても、祇園囃子はこんなに手間をかけて作るんだなあと思いました」などの感想が見られ、プログラムの実践を通して子どもたちが楽器の音の違い、奏法、音楽の成り立ちについて気づきを得たことが確

認できた。

6. 2 実践でみられた子どもたちの協同性

幼稚園では、菊水鉦の練習風景に見立てて竿に吊るした鉦を7~8人の子どもたちが一緒に打ち、残りの子どもたちは音に合わせて「こんちきちん(はい)」「こんちきちん(それ)」と唱え、互いの役割を協力的にこなしていた。また、隣合って鉦を打つ子どもたちは、音を合わせようとしたり、唱歌担当の子どもたちの「こんちきちん」の声のリズムに意識を向けて合わせようとするなど、協同的な関わりが認められた。

第1学年の実践では、ワークシートに記入したかけ声を3人一組で協力しながら発表をしたり、ワークシートに記入したそれぞれのかけ声を全員で止まらずにつないだり、太鼓や鉦、かけ声の役割分担をクラス全員で回しながら、お囃子を演奏した。どの場面でも子どもたちには、他者と互いの声やリズム、タイミングを合わせることに気持ちを向けて協力し合う協働学習の姿が認められた。

2年生の感想には、「最初はみんなが『このリズムがいい』』と言いつつ、最後は譲り合い、決めることができました。楽しかったです」「私はグループの人と一緒にいろいろ考えました」「私はみんなで協力して考えれば、いい考えがでるんだね、と思いました。またやりたいです」「みんなで協力して合奏を大成功できて嬉しかった」などの記述が見られ、グループ活動において複数の子どもが同じ目的を共有して協力し合う姿を捉えることができた。

音楽はそもそも協同的、集団的な性格を有しているが、プログラムの実践からは、幼児期の子どもたちの表現活動の中で芽生えた協同性が、小学校第1学年から第2学年への発達過程における子ども同士の人間関係の構築とも関わりながら深化していくことが示唆された。

6. 3 今後に向けて

今回は幼稚園、小学校のどちらにおいても祇園囃子を教材にして、和楽器の音の特徴を知ることから音楽づくりへとつなげることを試みた。それは身の回りに存在している音や音楽の再発見という意味も持つと考えられる。祇園囃子を

体験することにより、子どもたちはお祭に音楽があることを知り、興味を持って取り組むことができたといえる。

2年生の感想に「ちょっと久しぶりだけど、ちゃんとできました。1年生の時はそんなに上手じゃなかったけれど、ちょっと良くできるようになったと思いました。3年、4年、5年、6年もやりたいです」と述べられていた。ここには自分のより良い変化を肯定的に捉え、今後に見通しを持つ子どもの姿が窺える。2年生の「もっとやりたい」を含む肯定的な感想は77%あり、筆者らはこのプログラムが子どもたちの生活体験とつながる音楽学習をもたらすことができたのではないかと捉えている。この試みが1回きりのイベント的な体験とならぬよう、今後も子どもの音楽的成長を見据えたプログラム開発に取り組んでいきたい。

注

- 1) 研究成果としては、岡林典子・砂崎美由紀・山崎菜央・深澤素子・難波正明「幼小をつなぐ音楽活動の可能性—京都幼稚園と京都女子大学附属小学校1年生の実践をふまえて—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第10号, 2014, pp. 77-86/岡林典子・難波正明・佐野仁美・坂井康子・南夏世, 「幼小の子どもを育ちをつなぐ音楽活動の試み—遊び歌《しゅりけんにんじゃ》の実践をもとに—」『関西楽理研究』XXXII, 2015, pp. 41-52/岡林典子・佐野仁美・坂井康子・難波正明・南夏世・山崎菜央・深澤素子「領域『表現』と小学校音楽科をつなぐ音遊びの可能性—『マカス作り』によるオノマトペ表現と協同性の成り立ちに注目して—」『京都女子大学発達教育学部紀要』第14号(1), 2018, pp. 115-124/佐野仁美・岡林典子・坂井康子「『音楽づくり』へつなげる幼児の表現遊び—絵本を用いた実践をもとに—」『関西楽理研究』XXXIII, 2016, pp. 15-31/岡林典子・佐野仁美・坂井康子ほか「領域『表現』と小学校音楽科をつなぐ和楽器を用いた活動の試み」『京都女子大学発達教育学部紀要』第15号, 2019, pp. 109-119等がある。
- 2) 伊野義博「郷土の音楽—その特性と教材性」『学校音楽教育学研究』7, 2003, pp. 154-165
- 3) 高橋詩穂「祇園祭を核とした郷土の音楽のカリキュラム開発 (3 民族芸能Ⅲ, 日本伝統音楽の学習)」『学校音楽教育研究』18, 2014, pp. 185-186
- 4) 高橋詩穂「祇園囃子の特性を生かしたお囃子づくりの授業開発」(2 民族芸能Ⅲ 日本伝統音楽の学習)」『学校音楽教育研究』19, 2015, pp. 169-170
- 5) 高橋詩穂「支部プロジェクト【近畿支部】報告: I 郷土の教材から指導内容を考える」『学校音楽教育実践論集』3巻, 2019, pp. 150-151
- 6) 小島律子編著『生活と文化をつなぐ「郷土の音楽」の教材開発と実践』黎明書房, 2018
- 7) 樋口昭「京の音」『山町山鉦 特別記念号』祇園祭山鉦連合会, 1991, pp. 132-134
- 8) 前掲注4)と同書
- 9) 片岡義道編著『祇園ばやし』祇園祭山鉦連合会発行, 1982
- 10) CD 長刀鉦祇園囃子保存会『祇園囃子』KYOTO SRECORDS, 1993
- 11) 伊野義博「言葉・息・身体と唱歌」徳丸吉彦監修/日本音楽の教育と研究をつなぐ会編著『唱歌で学ぶ日本音楽』音楽之友社, 2019, pp. 13-15
- 12) 澤田篤子「掛声・囃子ことば」徳丸吉彦監修/日本音楽の教育と研究をつなぐ会編著『唱歌で学ぶ日本音楽』音楽之友社, 2019, p. 16
- 13) 岡林典子「協同性に着目した幼小接続における和楽器を用いた音楽活動—京都幼稚園での実践を中心に—」京都女子大学発達教育学部教育学科教育学専攻・児童学科『学長採択型課題解決プロジェクト「教育学専攻・児童学科と京都幼稚園との教育研究連携」』報告書, 2020, pp. 10-18
- 14) 前掲注13)と同書
- 15) 前掲注6)と同書

謝辞

本研究に当たり、元京都幼稚園主事の深澤素子先生ならびに年長クラスご担任の松田幸恵先生、笹周子先生、園児の皆さん、附属小学校の児童の皆さんにご協力を頂きました。記して深くお礼を申し上げます。

※本研究はJSPS(課題番号17K04889代表者: 岡林典子「協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発/課題番号16K04719 代表者: 佐野仁美「教員養成課程における音楽的創造力を高める教授法の開発/課題番号17K04655 代表者: 坂井康子「『声・ことば・うた』の音響的・韻律的分析に基づく保育・教育の表現活動の研究」)の助成を受けている。